〔資料〕

グジャラートとヒンドゥスターンにおけるオランダ東インド会社 1620年－1660年（Ⅲ）

H.W.ファン・サンテン
長　島　　弘　（訳）

序　論

「西部地方」すなわちグジャラート、ヒンドゥスターン、ペルシア、アラビア半島などの地方との会社の貿易上の接触の始まりの時期についてはテルプストラ（H.Terpstra）が既に十分述べている[1]。そこでここでは短い概観で十分である。すでに1601－1602年にあるゼーラントの前期会社の2人の商人が、インドネシア島嶼部とグジャラートとの直接交易の可能性を探るために、1隻のグジャラート船でアチェーからスーラトに向け旅をした。この市場調査は突然中断された――その前期会社の2人の社員は当時インドの西海岸でまだ勢力の強かったポルトガル人によって捕えられてゴアで絞首刑にされたのである。グジャラートにおける交易の可能性を探ろうとした後続のオランダ商人もまたそれを自らの死でもって購わなければならなかった。すなわち、すでに1606年にＶＯＣの「商館員 factor」としてスーラトに勤務していたダーヴィト・ファン・デインセン David van Deynsen が、1608年に不審な状況のもとで亡くなった。おそらく彼はポルトガル人たちの迫害の下で自殺したのであろう。

しばらく会社はグジャラートに商館を開設する努力を放棄した。しかし、1615年にさまざまな理由から会社はよみがえった活力でもってその努力を

再開した。その時まで会社は島嶼部の香料との交換手段として不可欠な綿布を主にアチェーで買っていた。そこへグジャラート商人が大量に綿布をグジャラートから運んで来ていた。アチェーの商館の廃止後、会社は早急にスーラトにインドの繊維製品の買付けのための事業所を開設しなければならないと決定した。第２の考慮は、イギリスが1612－1613年にスーラトに商館を設立したということである。グジャラートにおけるポルトガル人の影響力は人々が彼らを恐れることがほとんどないまでに縮小していた。彼らはもはや競争相手をその地域から追い払うことができないようにみえた。グジャラートとの貿易関係を結ぶための再度の努力への直接の動機はムガル朝当局がファン・デインセンの残した商品を返すと提案したことである。1615年に小グループの社員が東海岸のマスリパタムから陸路スーラトへ向かった。彼らはそこで遺留商品のごく一部しか発見できなかった。しかし、その旅のもっとも重要な結果はこの地域の貿易の可能性についてよく知るようになったことである。その結果その少し後の1616年にスーラトに商館が明確に開設された。しかし最初の数年はＶＯＣの船は１隻もスーラトに現れなかった――なぜなら会社が島嶼部でその勢力を集中しなければならなかったから。ようやく1620年頃から、インドネシア島嶼部での会社の地位の確立の後、グジャラートでのＶＯＣの交易が真に始まった。スーラトに従属する事業所がブローチ、バローダ、キャンベイ、アフマダーバード、ブルハーンプル、アーグラに設立された。キャンベイとブルハーンプルの商館は成功せずまもなく閉鎖されたが、その他の上述の都市には会社は17世紀の間ほとんど継続的にそれぞれ商館を保有した。すでに以前から社員がスーラトから内陸深く位置するアーグラまでバヤーナ産の藍を買うために時々旅をしていたが、1621年にワウター・ヒェウテン Wouter Heuten とフランシスコ・ペルサールト Francisco Pelsaert がアーグラに恒久的な基地――つまり当時ムガル朝インドの諸商館を統括していたファン・デン・ブルク Van den Broecke によってインドの「最良の乳牛の１頭」になることが約束された事業所――を設立した[2)]。

この地域における会社の貿易構造に進む前に、会社の政策を実行する人物たちについて若干の言を費やすことが有用である。ただちに注意を引くことは、スーラトおよびその管轄下の諸商館における社員の数の少なさ——絶対的な意味でも、またアジアにおけるＶＯＣの社員総数に対する割合においても——である。ムガル朝インドではＶＯＣは交易のみを営んで、何ら城塞を保持していなかったので、比較的少数の社員で足りることができたのである。1619年には総数18名の社員がグジャラートとヒンドゥスターンの諸商館で勤務していた[3]。1628年にはその数が約35名に増大し、その内過半数（22名）がスーラトに駐在し、残りはアフマダーバード、アーグラ、ブローチ、バローダに駐在していた[4]。1630年－1631年のグジャラートの飢饉の間に死亡と避難によって総数が23名——その内12名がスーラトに、６名がアーグラに、５名がアフマダーバードに——にまで減少した[5]。1635年にはその数がさらに15名にまで減少した[6]。これが最低で、その後は17世紀中総数はただ増加し続けた。1651年に諸商館は51名の館員を数えた[7]。17世紀末には貿易の拡大が総数のいっそうの増加を必要とした。1687－1688年にはアジアにおける社員の総数が陸上で11,551名で、またおそらく約１万名が航海中であったのに対して、スーラトの商館およびグジャラートとヒンドゥスターンの他の施設の館員数は78名からなっていた。その年のスーラトでの原地人雇員の人数は150名が挙げられている[8]。18世紀にはその数がさらに増加した。スーラトとその管轄下にある諸商館の総計は1750年頃平均して300名を数えた。その後の数十年間は人数が急速に減少した[9]。奴隷労働については会社はムガル朝インドにおいては組織的な規模では使用しなかった。しかし、高位の社員はそれぞれ——ある者は大変多く——奴隷を私有していた[10]。

スーラトに住むＶＯＣ社員は、イギリス人、ポルトガル人、アルメニア人もその一員であるところの複合形態のキリスト教徒共同体の一部分を形成した。この共同体は宗教・政治・経済面における大きな内部的相違にもかかわらず、外部に対しては１つの社会的に緊密な「民族 natie」として

自己を紹介していた[11]。外部の者にとって社会面でのローマ・カトリックとプロテスタントとの間の区別をすることはおそらく困難であったろう。特に公的な、あるいは儀礼的な事柄の時には、スーラトに住むキリスト教徒は1つの「民族」として現れた。例えば葬式の際にそれが明らかに現れた。従ってＶＯＣの長官 directeur パウルス・クローク Paulus Croock の1642年に死去した妻は、スーラトのオランダの教会の庭にある彼女の最後の安息の地（そこに彼女の立派な墓が今もなお存在している）に向かう途中、スーラトに滞在する全てのキリスト教徒に付き添われた。行列はイギリス人、オランダ人各1名のトランペット奏者によって先導され、その次にオランダとイギリスの会社各4名の社員によって挽かれた棺が続いた。その次には死亡した商館長夫人の女奴隷たちを乗せた車 wagen およびイギリス国旗およびオラニエ公家の三色旗〔オランダ国旗〕を持った2人の旗手。その次に黒衣に身をかためたＶＯＣの長官とイギリスの会社のそれが続き、その次に両会社の上席商務員、商務員、商務員補が官位にしたがって続き、そして最後にスーラトにいる全てのキリスト教徒――合計約60名――が続いた[12]。

スーラトのこのキリスト教徒共同体の統制から脱出しようとする者に対する反応は一般に異常なほど激しいものであった。社員や船員が（ムスリムの女性と結婚するために、あるいは下級の人々にとって船上での大変耐えがたい生活からこの手段で脱出するために）イスラム教に改宗した例は、1620年－1660年の間には数が少ない――10～20人以上ではない――が、スーラトとバタヴィアとの間の通信文の中では大変注目されている。問題になっているのはほとんど全てのケースにおいて自由意志でのイスラム教への改宗であったにもかかわらず、キリスト教徒共同体の統制からのがれた「棄教者」を再びキリスト教徒「民族」内にもどらせるための狂信的な努力がなされた[13]。しかし、強調しなければならないことは、共通の宗教によって結ばれたこの「民族」は、多数の外国人が住んでいたスーラトにのみ存在していたということである。アフマダーバードやアーグラなど

内陸部にあった商館で働いていた社員は、バタヴィアや共和国の社会的統制から離脱していたのみならず、スーラトの彼らの同僚からもまた離れていた[14]。

会社員は総督や十七人会に対する彼らの手紙の中で商館での日常生活について少しもあけっぴろげでなかった。しかし、我々が持っている若干のデータは、彼らがムガル朝インドで豪奢な生活をしていたことを十分に指摘している。彼らはＶＯＣの海上での能力を認識しており、重要で信用できる商人としての彼らの地位にふさわしく行動した。威厳に敏感なインド社会における威厳のあるシンボルの重要性は一般的に認識された。ムガル朝インドの諸事業所の〔全体の〕長たる長官は、護衛隊なしには、また鼓笛隊と国旗に先導されることなしには、商館の外へはめったにでかけなかった。「そこの人々がしている豪奢ぶり――ある者は黄金で身をおおっている――」について再び情報が届いたとき、総督は不承認の意志表示をすること以上何もできなかった[15]。

ムガル朝インドのさまざまな事業所の社員の行動を統制する可能性は限られていた。海岸に近くてそのために接近しやすい諸商館では、特別にそのために派遣された監査官 inspecteurs に帳簿を監査させることはまだ可能であった。しかし、たとえばアーグラやアフマダーバードの商館に関しては、距離が抑制的に作用した。バタヴィアではこれらの商館から会計業務のために送られてきたものに完全に依存した。1635年になってもまだスーラトの長官が,監査のためにアーグラから送られてきた仕訳帳 negotiejournalen と元帳 grootboeken は、「単に形式的に、内容〔を隠すため〕の花として、そしてスーラトの商館と協調するために（商人の外観〔のために〕）つけられている」と書いている[16]。 特にこのために、アーグラに駐在した社員たちが更迭され、この後会計業務の質が向上したが、それでも全体としてムガル朝インドの会社員は自分がしたいことをする大きな自由を享受していたということができる。この地域のＶＯＣ社員が――アジアの他の地域の彼らの同僚たちとまったく同様に――提供された機会を自

己の便宜をはかるために利用したであろうということは明白である。明るみに出された多くの不正や私貿易の例はおそらく氷山の一角をなすにすぎないだろう。「欠損 laccagie」（送り状の重量とスーラトでの商品の到着時の実際の重量との乾燥の結果としての格差）の誇張、およびこのようにして詐取した商品を自己の利益のために売ること、買付け・販売・運送の際に一般的であったさまざまな手数料比率について説明しないこと、支出の計算の水増しなどは――バタヴィアの総督にとって追求の困難な――不正のごくわずかな形態にすぎない[17]。 不正行為や私貿易でかせいだものを彼らはたいてい任期のおわりにダイヤモンドや他の宝石の形で共和国へこっそりと持ち出した[18]。 ＶＯＣ社員の死亡率は高かったが、高位にあって気候や病気に抵抗できたものは、本国に帰ったときに、大抵余生を安楽に送ることができた。たとえば、ウォレブラント・ヘレインセン・デ・ヨング Wollebrandt Geleynssen de Jongh は、アジアのさまざまな事業所での長いキャリア――その中にはムガル朝インドでの14年間もあるが――の後、1674年の死去に際し、約61,000グルデンを終身年金証書と債権で、そして彼の生地アルクマールの近郊の１軒の家、アルクマール内の３軒の家、18ヘクタール以上の土地を残した[19]。

特にアーグラ事業所は、そこにはヘレインセンも３年間上級商務員として勤務したことがあるのだが、私貿易と汚職のさかんな地域として悪名が高かった。それは大変なものであったので、アンボイナ生まれのヨハン・タック Johan Tack が、彼はムガル朝インドにはじめは助手 assistent として後には上級商務員としてアーグラで28年間勤務していたのだが、その死去に際してごくわずかな遺産しか残さなかったことについて総督が真の驚きを表明したほどであった。未払いの給与6,377グルデンの差引残高にたいして約2,400グルデンのアーグラでの負債があった。「そこでそんなに質素に暮らした商人を今まで見たことがない。彼は贅沢に散財していたにちがいない」と総督は推論した[20]。

しかし社員がどの程度私貿易をやっていたのかとか、どのような方法で

不正を行なっていたのかという問題よりもっと重要なのは、社員がバタヴィアや共和国に送った手紙や報告の中の情報がどれだけ信用できるかという問題である。価格や販売可能性、買付け問題などに関するすべての情報が、どの程度、私的利害のための単なる「煙幕」やあるいはホルデン・ファーバー（Holden Furber）の言葉を使用すれば、「見せかけ」として役立ったにすぎなかったのか[21]。この問題に対するはっきりと肯定的な解答も否定的な解答も与えることはできないが、原資料の信憑性についてのはっきりとした楽観論は十分正当化されるように思われる。イギリスとオランダの資料の比較によって、不正の最も明白な例を十分認識できる。さらに、イギリスの会社員もオランダの会社員も、つねに自分のライヴァルによってなされた不正について自分の上司に詳しく報告することにやぶさかではなかった。第2に、私的コレクションを利用することが可能である。ある特定の地域の会社員相互間の通信文の中の情報は、単にバタヴィアや共和国宛の「公式」書簡の中のそれよりずっと詳しいのみならず、より信憑性のあるものであるとの印象を与えてくれる。その次に、バタヴィアから派遣された監査官もまた特定の不正のケースを暴露したし、時には偶然の情報から――大変興味深い藍の不正（第4章を参照）の場合のように――地方的なレヴェルでの社員の役割についての予期せぬ情報を我々が得ることもある。それゆえ、見せかけの中に大きな「のぞき穴」があり、オランダ、イギリスおよび時にはインドの資料の比較により、そして私的なコレクションの利用により、この地域のＶＯＣの活動のかなり信頼できるイメージを得ることが可能であると我々は結論できるのである。

しかし、社員はお互いのことについてあまりあけっぴろげではなかった。上から下までのすべてのＶＯＣ社員はＶＯＣの諸規則の強い束縛から多少とも逸脱していた。各人が隠すべき事柄を持っているような状況の下では、同僚についての情報をバタヴィアの総督宛に利用することは危険であった。幾人かの野心的な（あるいは嫉妬した）下位の者が自分の上司についての危険な情報を提供することが総督の好意を得るためのひとつの方法で

あると考えたと思われるが、しかしそのような方法は確かに危険なしとはしなかった。「上級商務員 Sr.アーレント・バーレントセン Arent Barentsen の妻アドリアナ・ファン・アドリヘム Adriana van Adrichem と下級商務員ヤコブ・ファン・キッテンステイン Jacob van Kittensteyn との間の・・・恥ずべき私通」についての、および長官バーレント・ピーテルセン Barent Pietersen の妻が上級商務員カレル・コンスタント Carel Constant と関係を持っていて、妊娠中絶を行なったとの告発についての看護士セイメ・ウェイベス Sijme Wijbes のそれのようなゴシップは、たしかにＶＯＣの輝かしい経歴に寄与しなかった[22]。すでに述べたヘレインセン・デ・ヨングもまたアーグラから彼の部下タックからの総督宛の一通の手紙がバタヴィアに届いた時に、彼がそこにいたことから大いに救われた。その中にはヘレインセンによれば次のように書かれていた。「わたし〔ヘレインセン〕がアーグラでほとんど毎土曜日に家を開放して、愉快な仲間たちが酒を飲んで、時々売春婦を呼んで、獣のようなむだ話をして大いに遊んでいた」と[23]。その場で彼は対応でき、反撃した。ヨハン・タックがあまり昇進できず、その後の半生をアーグラという辺鄙なところで留まったといわれるのはおそらくこの関連で重要である。同僚についての情報――真実であれ虚偽であれ――のバタヴィアへの提供は、それゆえ結局全ての場合に有利であったわけではなかった。そのような記録は史料としてあまり価値がない。ゴシップと真実との間の境界線はここではしばしば引くことが困難なのである。

ダース・グプタ（Das Gupta）は、17世紀におけるグジャラートの――そしておそらく全インドでさえ――最重要な港としてのスーラトの地位は、大部分ムガル帝国のおかげであると述べた。交易拠点（エンポリアム）としてのスーラトの機能はムガル帝国の「贈り物」であった[24]。1573年のグジャラートのムガル帝国への併合以後、スーラトの直接の後背地は相当拡大された。この後スーラトは単にグジャラートの生産地域とインドネシア島嶼部や中

東、ヨーロッパの販売市場との間の結節点としてより多く機能しただけではなく、部分的にはアラハーバードやカナウジ、ファイザーバードの生産センターにとっての輸出港としても機能した。しかしグジャラートのムガル帝国への併合は、17世紀のスーラトの繁栄に寄与した唯一の要因ではなかった。16世紀にほぼ同時に3つの大帝国――北インドのムガル帝国、ペルシアのサファヴィー帝国、中東のオスマン帝国――が出現し、これらの帝国内に商業活動の大規模な展開に適した安定した状況が形成され、それによってスーラトはますますインド洋西部のエンポリアムとして立ちあらわれた[25]。同市の富裕な商人たちは毎年繊維品、藍、無数の他の商品を載せた何十隻かの船を中東へ、またそれより少数の船を東南アジアへ派遣した。アラビアへはさらに、メッカやメディナの聖地を訪問しようとする多数のムスリム巡礼者をも運んだ。それらの船は帰路に特に多量の金や銀を持ち帰った。それらはその後スーラトの造幣所でモフル貨 mohur〔*muhr* 金貨〕やルピヤ貨 rupiya〔*rūpya* 銀貨〕に鋳造され、それから内陸部へと流通路を見いだしたのである。

16世紀にはポルトガル人もアジアの舞台に登場した。彼らの最も重要な目的は香料貿易の支配であった。しかしそれは大変限定的にしか成功しなかった。アジアにおける最も重要な海上勢力としての地位をポルトガルから継承したＶＯＣは、この点に関してより大きく成功した。同社はアジアにおけるいくつかの貿易ルートを支配することに成功した。その時までは特にグジャラート商人が島嶼部の香料を紅海やペルシア湾の港に運んでいた。それから先は隊商が香料をさらにヨーロッパへ運んだ。しかし、オランダ人が島嶼部の香料生産地をより強く支配するようになるにつれて、東南アジアと中東との間の特にグジャラート船によって行なわれていたこの貿易が減少していった。ＶＯＣはヨーロッパでの香料貿易を喜望峰ルートへ移すことができ、グジャラート商人は自らの関心を以前よりもっとインドと中東との間の貿易に集中することを余儀なくされた。

アジアの貿易システムにおける諸会社の位置についての全体的理論を展

開したニールス・ステーンスガールド（Niels Steensgaard）は、会社による香料貿易の支配と香料〔貿易〕ルートの変更は、17世紀初頭のアジアにおける包括的な「貿易革命 trade revolution」の１つの枝部分であったという意見である。〔彼によれば〕イギリスとオランダの東インド会社の到来以後、アジアとヨーロッパの間の古くからの隊商貿易はほとんど消滅した。諸会社は彼らの先行者たるポルトガル人が失敗したところで成功した。すなわち、中東経由の陸上ルートから喜望峰経由の海上ルートへの転換である。両社はこの成功を、彼によれば、まず第１に彼らのすぐれた貿易組織に負った。注文の調整、在庫品の形成、固定販売価格の設定、選択的販売方法などの手段によって、彼らは市場の先行きの不透明性をかなり縮小した[26]。それに反して、アジア人によって行なわれた貿易――ファン・ルール（J.C.van Leur）にならってステーンスガールドが呼んだところに従えば、「行商人貿易 peddling trade」――は、高度に予測不能な経費、とりわけ関税（「保護費 protection costs」）によって、そして需要と供給が互いにうまく調和しないことと売手と買手の間を安定化させるような中間介在者の欠如との結果としての市場の高度の不透明性によって特徴づけられた[27]。

諸会社はアジア人の商人だけでなくエスタード・ダ・インディアとも構造的に異なっていた。ステーンスガールドに従えば、エスタード・ダ・インディアを商業企業体と見るよりもむしろ「再分配企業体」、すなわち貢納金を要求し保護を売る機関とみなさなければならない。カルタズ（パス）〔航海許可証〕の販売という手段によってポルトガルは自己の支配するさまざまなアジアの海上ルートに関税を課し、この点で、通商路に沿って関税を課したオスマン帝国、ペルシア帝国、ムガル帝国のようなアジアの陸上帝国と実質的に異ならなかった。「ポルトガルの胡椒独占は商売ではなく税関であった。」[28] 反対に、イギリス人やオランダ人はアジアにまず第１に商人として登場し、そして保護費の支払いや受取りをできるだけ避けるよう、すなわちステーンスガールドの用語を用いれば、「内部化する

internalize」〔自前で保護することによって保護費の支出を削減する〕よう努めた[29]。

一方で諸会社は彼らの卓越した組織形態によって、他方で保護費を「自分の方へ引き込む」ことによって、アジアの商人やポルトガル人との競争において結局勝利を獲得したのであるという。

この理論に対して、さまざまな点で批判できる。まず第1に、ステーンスガールドがアジアの商人に関して用いた「行商人」という用語は、インドの商人全てに対してはあきらかにふさわしくない。たとえばスーラトには大々的な、アジアの大部分に広がった貿易網をもった大変多くの富裕な商人がいた。彼はアジアの商人を過小評価している。さらに、アジアとヨーロッパの間の陸路経由の貿易の全てが諸会社の到来以後打倒されたであろうというのは明らかに不当である。確かにＶＯＣは17世紀中ごろからアジアとヨーロッパにおける丁子貿易と（それよりやや劣るが）づく花と肉づくのそれとを独占したが、胡椒、綿布、藍――これらは主要物産の若干を挙げたにすぎないが――などの貿易の支配なんてとんでもないことであった。会社は無数の異なった物産を数十カ所の異なった市場で取引した。生産地から販売市場にいたるまでの完全支配権は、限られた若干の物産に関してのみ彼らに与えられていたのである。私はこの点について第2、4、5章で詳しく立ち返って述べる。

ステーンスガールドがめずらしく全く見過ごした別の点は、会社がポルトガル人の航海許可証制度を継承したという点である。ＶＯＣもまたアジア商人に航海許可証を販売した。ポルトガル人の「再分配」企業体は、（おそらく同一規模においてではなかったにしても）事実上継承された。したがってこの点に関してはステーンスガールドが考えるよりはるかに小さな相違しかポルトガル人とＶＯＣの間には存在しなかったのである。

これらの批判点は、ポルトガル人と諸会社との構造的差異に対するステーンスガールドの注目それ自体は正しいという事実を変えはしない。しかし私はここで一方でのオランダおよびイギリスの東インド会社と他方で

のエスタード・ダ・インディアとの間の別のもっと本質的な相違点を強調したい。諸会社、特にＶＯＣはアジアにおける貿易の流れを支配するために自らの海事的・技術的能力をより有効に利用したように思われる。ＶＯＣの場合暴力が彼らの貿易戦略のなかに大変効果的に組み込まれた。しかしＶＯＣがどんな状況下でも自己の海上での優越性を、特定の市場に進出するために、あるいは特定の商品の流通を支配するために利用できたわけではなかった。必ずしも常に海軍力が市場の支配にと「転化」させられたわけではなかった。いくつかの条件が満たされねばならなかった。すなわちアジアの商人たちや彼らの支配者との特定の物産の貿易の支配をめぐっての紛争が関係地域でのＶＯＣの諸活動にあまり大きな影響を与えてはならない。さらに市場支配は地理的にあまり広大すぎてはならないだろう。紛争が軍事的・地理的に限られた範囲にとどまった限りにおいてのみ、海上での暴力が成功を収めることができた。私は17世紀におけるＶＯＣのアジアへの到来は既存のシステムに新局面をもたらしたという点を強調したいが、しかし同時にそれはＶＯＣの卓越した組織形態あるいは保護費の「内部化」の結果というよりはむしろ会社の技術的・海事的優越性に依拠してＶＯＣが若干の場合に行なった暴力の効果的な使用の結果であったという点も強調したい。この点には第２章で立ちもどる。

島嶼部の香料生産地の支配と競争相手のアジア商人にたいする航海許可証の制限的発行政策という手段でＶＯＣが香料市場を相当程度独占することに成功した――ヨーロッパだけでなくアジアでも――ということがほぼ17世紀中ごろに明白になった。グジャラート商人は東南アジアと中東との間の香料貿易を奪われたのである。

ムガル朝インドに関する歴史叙述上の１つの中心問題は、諸会社の影響がこのインド商人の貿易能力の削減ということに限定されていたかどうかということである。この「貿易ルートの変更」がまだ領土的所有権が獲得されないこの時代における西洋人の諸活動の唯一の結果であったのか、それともこれが窮極的にインド亜大陸に対するイギリスの優越に終わったと

ころの西洋勢力の浸透過程の始まりを意味したのか。英領インド植民地の礎石がすでに17世紀に置かれたのか。ある人たちは、17世紀における諸会社の到来によりインドの物産に対する需要はたしかにいくらか増大したであろうが、亜大陸の縁辺で貿易を行なった若干の西洋商人がこの地域の経済に深刻な影響を与えることはできなかったと考えている。たとえばP. J. マーシャル(Marshall)は、「彼らは自らの経済システムを創出したというよりもむしろ何世紀もの間繁栄を続けてきた複雑で洗練された諸経済機構に自らを適応させざるを得なかったのであり、19世紀より以前にはヨーロッパ人はそれらの経済機構の中に大きな変化を導入することができなかったのである」と考えている[30]。 諸会社は自己の貿易への融資に際してアジア人の資本からは大いに独立していたし、大体に置いてインドの手工業者や農民によって生産された商品の供給をまったく、あるいはほとんど支配しなかったと主張される。

それに反して、最近のある論文でC. A. ベイリー (Beyly) は、「従属」という概念は前近代の諸経済にも、従ってムガル朝経済にも適用できると主張している。すなわち歴史家たちはヨーロッパ経済がムガル朝インドのそれに影響を与えなかったと誤解している。「ヨーロッパ人が政治的・行政的支配を試みるよりはるかに以前から、ヨーロッパ人の貿易や軍事技術によって土着の諸経済はすでに『畸形化されていた』とはいえないまでも、影響を受けていた。」[31] 従って我々が今日ムガル朝インドにおける前近代的なものとみなすものは、実際は西洋の影響によってすでに「変容された」ものでありうると主張される。その際ベイリーはムガル朝インドにおける西洋人の諸活動の間接的結果にとくに強調点を置く。たとえば、ベンガルへの諸会社による大量の銀の輸入——それでもって彼らは綿布や絹布の買付けの財源としたのだが——を彼は指摘する。この莫大な銀の注入がベンガルにインフレーションを引き起こし、この間接的方法で諸会社はこの地域の経済に深刻な影響を与えた。17、18世紀の西洋の浸透に関する討論はまさに貨幣経済化、貨幣流通、信用制度などのテーマに集中されなければ

ならない、と[32]。この種の影響は当然証明が大変困難であるけれども、西洋の貿易活動の間接的影響についてのベイリーの注目は正しいと思われる。グジャラート人の貿易の「ルートの変更」やインド物産の需要の増加のような、アジアに西洋人のいることの直接的で目に見える影響は、銀の供給の影響やおそらくそれ以上に重要な、インドの農村社会への信用手段を介しての西洋の浸透の影響などのような間接的で目に見えない影響にくらべて、土着の経済にとってそれほど重要であるとは思われない。これらの問題は第3、4章で検討される予定である。

この研究の別の1つのテーマは、一方におけるムガル朝政府と他方における商人や金融業者との関係である。政府という言葉はこの場合官僚制的・階層制的な「近代的」行政機構ではなくて、共に「ムガル国家」を構成している何千人かの人たちの関係のネットワークと解されなければならない。ムガル朝官僚にとって行制的役割と個人的利害とは漠然としか区別されていなかった。ムガル朝政府とその臣民との関係についてはさまざまな理論がある。全体として3つの学派を識別できる。

1923年に出版された『アクバルからアウラングゼーブへ』という先駆的な研究においてW．H．モアランド（Moreland）は、ムガル朝当局と商人との関係は――しかり、政府と全ての臣民との関係でさえ――完全に搾取的な性質のものであったという説を支持した。ムガル官僚は高率関税や恐喝により一貫して農業や商業の剰余を最大限搾取しようとした。実際、政府はいっそう先に進んだ。すなわちその搾取はムガル朝インドの住民の大多数の生活水準が最低限度以下になる程であった。彼によれば商業や農業の促進のためのある程度一貫した政府の政策は全く論外のことであった[33]。この理論は今日もはや一般的には信奉されていない。ムガル朝政府ができるだけ多くの税収を農業や商業から獲得しようとしたことはもちろん真実であるが、モアランドが見おとした本質的な点は、非常に多くのムガル朝官僚に商業や農業の促進やそれらへの投資がこの目的に最も寄与するという観念があったということである。私が明らかにしたいとのぞんでいるよ

うに、若干のケースでは一種の「開発志向」の行政政策さえも見いだすことができる。

モアランドの後、M．N．ピアスン（Pearson）が国家と社会との関係——と呼びうるもの——についての別の総合的な理論を展開した。グジャラート王国のスルターンたちは、またグジャラート王国のムガル帝国への併合の後にはムガル皇帝は、領内の商人や金融業者の活動に関心がなかったし、後者も前者に関心がなかった。政府と商人は別々の世界に住んでいた。経済人の世界と政治人の世界とは相互に全くあるいはほとんど接触しなかった[34]。このようにピアスンは互いに独自に研究されうる2つの別々の範疇を作り上げた。彼はまったく問題の存在すら否定した。諸会社の文書類からはムガル朝行政官僚と商人たちとが互いに緊密な関係を維持していたことが少しの疑いもなくあきらかである。しかしこの関係の性質がどのようなものであったかが問題なのである。

これに対して特にK．レオナルド（Leonard）やF．パーリン（Perlin）、J．C．ヘースターマン（Heesterman）がより説得的な説を対置した。彼らによれば、政府と商人や金融業者との関係を特徴づけようとすれば、むしろ相互依存という言葉で語らねばならない。信用供与や諸州から帝国の中央への税金の移送の分野では、政府でさえ相当にこれらの金融業者のサーヴィスに依存していたように思われる。ムガル皇帝たちはムガル国家が事実上依存しているところの財政的ネットワークを維持するために商人や金融業者のサーヴィスを利用した。まさにこの相互依存と利害のからみあいとがきわめて重要であるように思われる[35]。

従って、これらの商人とムガル国家とがそのうちで活動しているところの空間についてこの序論で言及することはよいことであろう。商人と官僚との間の機能の境界線は決定的なものではない。ムガル官僚もまた商売をしたし、いくらかの場合には商人が行政に直接の影響を及ぼした。商人たちは自己の利益を擁護するためにのみ自己の資本を用いたのではなかった。彼らは地方レヴェルや宮廷レヴェルでの政治的活動に恒常的に参加し

ていた。一例に言及すれば、1648年にミール・ムーサーがムガル皇帝によってムタサッディー（スーラト地方長官）に任命されたが、それは「この町の代表的商人たちから勧告された若干のアミールたちammerauwen [amirs「貴族」]の示唆による」ものであった[36]。たしかにこの商業センターたるスーラトではムガル朝の地方行政官の商業的洞察力は不可欠なものとみなされていた。ＶＯＣの長官によれば、1661年のムタサッディーであるムスタファ・ハーンはこの点に関して明らかに前任者より劣っていた。彼は「悪い性格ではない……が、名家の出身の貴族で商人ではないので時々下僚からだまされる。」[37] 1647年のムタサッディーであったアリー・アクバルはまさにスーラトの商人社会出身であった[38]。

商人とムガル皇帝との間の関係をスケッチするために私はここでＶＯＣを一方の側としスーラトの商人たちとムガル朝官僚を他方の側とする1648年－1649年の紛争についてより深く立入ってみたい。17世紀のムガル朝インドでは商人たちには自分たちの問題について宮廷側に関心を持たせる可能性があったということをこの紛争は示してくれる。商人たちはそれを通して自己の利益が助長されるような情報チャンネルを持っていた。アジア的政体の内部におけるＶＯＣの機能に関しても1648年－1649年のこの紛争――1620年－1660年の時期における会社のムガル朝インドとの間の最大の紛争――は重要である。それはＶＯＣにとって暴力がその商業政策の一部をなしていたことを明瞭に示している。ダンピングやそれに類する「通常」の貿易政策が失敗した時には暴力行使が次のステップであった。

会社を一方の側としグジャラート商人たちとムガル朝当局者たちを他方の側とする1648年－1649年の紛争は、現在のマレイシアに属するペラク、ケダー、バンゲリとインドとの間の錫貿易をめぐって展開した。1641年のポルトガル人からのマラッカの征服の後、この地域的エンポリアムに関するＶＯＣの政策に２つの互いに矛盾した傾向をみることができる。一方で会社はエンポリアムとしてのマラッカの地位を維持し、できるだけ拡大することを欲したが、他方でこの基地マラッカからペラクやケダーのような

錫の生産地に対して排他的・独占的なシステムを課そうとする欲求――窮極的には前者より強力な傾向――があった[39]。はじめ会社はマラッカ行きのパス〔航海許可証〕をアジア人の船に大規模に与えつつ、同時に関税政策によって錫の生産地をうまく操作することによって、この2つの互いに矛盾する原則を調和させようとした[40]。マラッカ占領後の数年間に、ＶＯＣはさらに錫生産の独占権を獲得するためにマレイシアの支配者たちと協定を締結しようと試みた[41]。しかし上述の2つの目的――一方での地域的な積替え港としてのマラッカの発展の促進と他方での錫の生産地に対する支配の拡大――を調和させることはできなかった。ケダーやバンゲリとの「排他的な」貿易協定は常に忌避されたし、ペラクとはおよそ何らの協定も締結できなかった[42]。ＶＯＣはマラッカ行きのパスを大量に発行したが、同地での交易は拡大しなかった。インド商人は同港で関税のみを支払って、それからこの地域の積替え港としてのマラッカの機能の大部分を奪ったアチェーへと航海した。アチェーでインド商人は運んできた綿布を売り、胡椒と錫を買った。会社によるスマトラでの綿布の販売は、インドからもたらされアチェーや後にはとくにジョホール経由で販売された莫大な量によって常に停滞的であった[43]。

そこで会社はポルトガルから継承したパス制度に新しい内容を付与しはじめた。ポルトガル人にとって、アジアの船にある特定の航海に対して1通のパスが売られるパス制度あるいはカルタズ制度は、特に関税徴収の手段であった。しかし，ＶＯＣはこのパス制度を次第に「ヨーロッパーアジア間の貿易およびアジア内貿易における自己の利益を保護し拡大することを視野において、アジア商人の貿易の規模・構成・方向を統制するため」の手段とみなすようになっていった[44]。ＶＯＣが市場を支配しあるいは支配しようと試みている地域で交易しようと欲している船にはパスが発行されなかった。パス制度はアジア人の貿易を「再編成する」ための手段となったのである。

1645年に錫貿易におけるＶＯＣとインド人競争相手との紛争は頂点に達

した。スーラトのムタサッディーであるミールザー・アミーン Mirza Amin が、ムガル皇帝シャー・ジャハーン所有の１隻の船のために会社に対して１通のパスを要請した。その際新規なことはその船が直接アチェーへ航海して、関税支払いのためにマラッカに寄港するつもりはないとムタサッディーが予告していたことであった[45]。そこでスーラトのＶＯＣの長官は総督に、ムガル皇帝とその一族の「王の船」と私人の所有者の船とを区別するよう助言した。アチェーへ向かう「王の船」は、ムガル朝インドでのありうる影響との関係で、妨害してはなりませんが、マラッカで関税を払うことを拒む残りの船はＶＯＣが例外なく拿捕しなければなりません。「なぜなら、さもなければこの詐欺行為は決して終息しないでしょうから」と[46]。しかし総督は「もっと良い」解決策にたどりついた。関税支払いを確保するための唯一の方法は、関税が前もってスーラトで徴収されることである。支払うべき関税の支払いの後にのみスーラトの会社員はグジャラート船にパスを発行してよい。パスのない船は、チャンスがあれば容赦なく拿捕しなければならないと。「王の船」についても総督は免除しなかった[47]。１年間この規則が実施され、グジャラートの船主はマラッカに対して支払うべき関税をスーラトで支払った[48]。この先例のない行為によりスーラトでの緊張はさらに増大した。外国の商人がムガル朝臣民の船からムガル朝の港で関税を徴収するというムガル朝当局にとって耐えがたい状況が生じたのである。

しかしＶＯＣはさらに前進した。G. G. ファン・デル・レイン Van der Lijn〔総督〕は――彼が、「そのことは以前考えてもいなかったのだが、証明されつつある」と述べるように[49]――原則としてこの規則に満足していたけれども、1647年末にもっと過激な政策へと前進し、ＶＯＣ以外の船のアチェーへのあらゆる航海を禁止した。インドの商人の航海を徐々に制限しようとするこの時まで実施されてきた政策は、1641年以後もアチェーへの航海が可能であったため効果的でなかったように思われる。錫貿易の支配が会社の最も重要な政策となり、アジアの商人をマラッカへ誘

引するための政策は第二番手の策へと後退したのである[50]。

インドの商人に対するアチェーやその地域の他の港での交易の全面禁止の影響がスーラトであらわれないはずがなかった。ムタサッディーはそれでもやはりアチェー行きのパスを要請し、それが拒絶されると、ムガル当局者たちはスーラトの商人と協同してＶＯＣの船の荷積みを禁止することを決めた[51]。それが全てではなかった。1648年４月にスーラトのＶＯＣの商館が150人の盗賊によって襲われ略奪され、その際社員の１人が殺され、２人が負傷させられた。現金と商品で総計27,000グルデンが盗まれた[52]。盗賊の足跡は何ら発見されなかった。その目的はあらゆる点から明白であった。すなわちムガル朝当局とスーラトの商人が、自らの直接の責任を問われないような形で、インドのアチェーでの貿易を支配しようとするＶＯＣの試みはがまんがならないということを知らせたのである。

この直後に両グループは自らの宮廷でのコネを動員した。アーグラの会社員であるヨハン・タック――彼は流暢にヒンドゥスターニー語を話した――は、スーラト商館の強盗の件について弁償してもらうために1648年に当時デリーにあった宮廷まで旅行した。シャー・ジャハーン帝に謁見する前にタックは宮廷で最も有力なアミールのひとりでＶＯＣの支持者であるハキーカト・ハーン Haqiqat Khan と会った。この人物がタックをムガル皇帝に紹介してくれるにちがいないと思われた。ハキーカト・ハーンはアチェーでの貿易に関するＶＯＣの政策についてよく知られているようにみえ、アチェーでの貿易を急いで自由化するよう会社に助言した。「スーラトからそこへ航海する１－２隻の船をあなた方が大層もてあそび、かつ（その御方と敵対的というより友好的にあなた方が暮らしているところの）皇帝と口論することは大変悪いことです――陛下は（あなた方が望んだ）多くの土地を交易のために開放なされたのに」と[53]。また彼はタックがシャー・ジャハーン帝に贈ろうと意図している贈り物について意見を述べた。彼によれば毛織物類は価値が少なすぎたし、そのうえＶＯＣが参府をごく不定期にしか実行していないことに対して批判的であった。毎年

の参府と毎年の贈り物がより望ましいことであります――シャー・ジャハーン帝が「あなた方のことを記憶にとどめて下さいます」ように。「常に陛下の記憶の中にとどまることは、あなた方のような大商人たちにとって基本的で大事な事柄です。なぜならあなた方の大規模な取引は多くの困難や労苦を伴うからです」と[54]。ハキーカト・ハーンの仲介でタックはムガル皇帝によって謁見を賜り、そして盗まれた金額を会社に賠償するようスーラトのムタサッディーに命じたファルマーン（勅令）が彼に授与されることが約束された[55]。ここまでは参府旅行は成功であった。しかし今度はファルマーンが実際に書かれるまでの監視が必要であった。そのことの責任者であるワズィールのサアドゥッラー・ハーン Saadullah Khan がその任務を２カ月以上も引きのばした。その間に商人たちの代表が自分たちの利益を訴えるためにスーラトから宮廷に到着した。宮廷の有力なアミールたちの間に反ＶＯＣ感情が日増しに高まった。

まもなくそれが爆発した。タックはハキーカト・ハーンによって呼び出され、この人物は彼にくってかかった。タックの言葉によれば、「あなたたちはマラッカで10％［関税］を取りながら、ここヒンドゥスターンではあなたたちの商品から３½％しか払っていない。それにもかかわらず我が国民にパスを少しも授与しようとしないとは、あなたたちは大変不適切なことをやっているのだ。立ち去れ。岩で頭をぶち割れ。あなたたちは１隻の船の航海を妨げる以外に何ができようか。もし神がのぞみたもうならば、あなたたちが十分思い知るように、私は帝国全体において大いに妨害をさせるだろう。あなたたちはここであらゆる抜群の品々を陛下から欲し、それらは我々の助力で全て認められた。それなのにあなたたちはその生意気な不当さでもって盗賊のことを訴える。それもよかろう。そうであれば我々は何隻かの船をどこへでも派遣しよう。あなたたちに十分補償を命じよう……。この土地から出て行け。私があなたたちに言うべきことはこれで全てだ」と[56]。タックはそれでも１通のファルマーンを受領した。しかしそれにはスーラトの地方当局は盗まれた商品の回復のために最善を尽くさ

ねばならないとあるのみだった。そのファルマーンの趣旨はまったく「役に立たない」ものであったので、社員たちはそれをスーラトのムタサッディーに示すことさえしなかった[57]。

しかし会社は歩み始めた道を前進し続けることを固く決意していた。1648年に、モカから戻ってくるインド船を拿捕するには遅すぎる時期に、特にそのために派遣された艦隊がスーラトに到着した。しかしその年ＶＯＣはスーラトの面前でモカ帰りの２隻のグジャラート人船主の船を150万グルデン以上の積み荷もろとも拿捕した[58]。商館から盗まれた商品の弁償に次いでグジャラート船によるアチェーでの貿易が停止されるべきであるという会社の最重要な要求があった[59]。この点で彼らは成功したようである。ＶＯＣとムガル当局、スーラトの主だった商人たちとの間の交渉の後、会社は実際にその趣旨のファルマーンを授与された。ムタサッディーはＶＯＣに商館から盗まれた金額を支払い、そして会社の方は没収した現金を正当な持ち主に引き渡した[60]。

ＶＯＣの船舶によるスーラト港の封鎖は、紛争の程度をできるだけ限定することが目的であるという明確に描かれたシナリオにしたがって実施された。捕虜にされないために、西北インドの諸商館〔全体〕の長官はスーラトの前面の停泊地の船へ折りよく退去した。その後、モカから戻ってきた若干の船が停止させられ、それらに積まれていた金銀が没収された後に再び解放された。その後、交渉が始まり、そして会社は自分の欲していたものを実現するやいなや、商人としての役割に戻ったのである。これと関連して特徴的なのは、スーラトを封鎖した船自体がスーラト向けの商品を積み荷していたことである。スーラトの封鎖とグジャラート船の略奪は会社の海事的優越性と優越した軍事力という手段によって、ムガル朝インドにおける商人としてのＶＯＣの地位を危うくすることなく譲歩を引き出すための短期的で「戦術的な」行動としてもくろまれていたのであった。

しかし、このグジャラートの最重要港の封鎖でさえアチェーとインドの間の錫貿易の終焉を意味しなかった。ただのひとりのインド商人も圧力の

下で実現されたシャー・ジャハーン帝のファルマーンを遵守したようには思われない。しかもパスを発行するようにとの会社への圧力は決して弱まらなかった。さらに1653年に２人の社員が参府旅行中に（無知からかもしれない。しかしおそらく買収されたのであろう）アチェーへの航海を望んでいる全てのインド船にパスを発行するようＶＯＣが命じられるという内容のシャー・ジャハーン帝のファルマーンに同意した。マラッカでの関税支払いについては一言も言及されていなかった。会社が単にアチェー、ペラク、ケダー行きのパスを発行するだけでなく、バタヴィアやマカッサル、タイ――会社によってすでに長い間パスが発行されていなかった諸地域――へ航海することを望むグジャラート船にもパスを発行することをよぎなくされたとそのファルマーンを解釈することが可能であるようにさえ思われる[61]。およそ1660年ごろには最も楽観的な社員にさえ、アチェーや錫の産地をインド商人〔立ち入り〕禁止区域のリストに加えようとしたＶＯＣの試みが失敗したことが明らかになった。グジャラート商人による莫大な量の綿布の供給と大量の錫の買付けをなげく連祷が相次いだのである[62]。

散在する生産センターをもった広い地域での錫貿易を完全に支配することは不可能であった。マレイシアの領主たちと独占的な協定を結んで固定価格を実現しようとするＶＯＣの政策は、自由でＶＯＣに統制されないさまざまな港のある地域では現実的でなかった。消費市場の側面でも会社は解決不可能な問題に直面した。基地マラッカの征服の後、特にインド商人の錫にたいする需要が続く限り、錫の供給を独占しようとするいかなる試みも無駄に終わるだろうということを会社はすぐに悟った。最初はパス発行制限政策によって、次いでアチェーへの航海の全面禁止によって、そして最後にはスーラトの封鎖によってさえ需要を削減しようとした試みは、ＶＯＣがムガル朝インドにおける自己の商業利益をあまり危険にさらす用意がなかったので成功しなかったのだと思われる。ムガル朝インドの全ての港を何年間か封鎖することを含むムガル朝インドとの全般的で大規模な紛争のみが期待された結果をおそらく生み出していたことであろう。しか

しその場合でも成功するかどうかは事前には不確定であった。すでに1649年の紛争の間に、インドの商品をイギリス船の荷としてモカやバンダル・アッバースへ輸送することについてムガル朝当局がイギリス人に打診していた。ペルシアへは当然陸路も利用できた。

会社にそのような大規模な作戦を行なう能力があったかどうかという問題とは別に、会社はムガル朝インドにおける商人としての自己の地位を危険にさらす十分な用意もなかったと思われる。香料および銅の販売市場として、また藍および島嶼部での会社の貿易にとって不可欠な綿布の供給者としてのインドの重要性が、ＶＯＣをして錫貿易支配のために自己の海事的優越性を十分に発揮することを不可能にさせた。この意味でムガル朝インドにおける貿易利益がＶＯＣのあまりに攻撃的な行動を制約する保障をなしていた。ポルトガルの基地ディウを占領してこの要塞から貿易を行なうことが何度も考えられたけれども、会社はディウ攻撃を一度も敢行しなかった[63]。アフマダーバードやバローダ、ブローチ、そしてアーグラ以東での綿布の買付けは現地での社員の滞在を必要とした。海岸の堅固な基地から貿易を行なうことは北西インドでは不可能であった。ＶＯＣがこの地域での自己の影響力を拡大しようと試みるやいなや、この地域の社員は疑いもなく捕虜とされたであろう。会社が北西インドで狭小な限界内で活動することを余儀なくされているということがほぼ17世紀中ごろに明白になったのである。

錫貿易の支配をめぐる紛争はムガル朝インドにおける商業の位置と商人の地位について例証的である。商人、金融業者、ムガル朝当局の相互の利害の強いからみあいは、政治と商業との完全な分離を決して許さなかった。このからみあいは、どんな意味でも紛争を――あるいは暴力をも――排除しなかったが、しかしその紛争はほとんど決して「全面的」な性質のものではなかった。大抵の場合、それは相互の利害のからみあいの永久的分断をひきおこさない短期の「戦術的」な行動であったのである。

〔序論　完〕

原注

序　論

1）　I. H. Terpstra, *Westerkwartieren*, speciaal hoofdstuk 2 , 3 en 4.
著書や論文を参照の際、この注で私は簡略化された題名のみを述べる。「参考文献」の項によれば、完全な題名を復元することが簡単にできる。

2）　H.Terpstra, *Westerkwartieren*, p. 228, P. v. d. Broecke aan J. P. Coen, Surat, 2–4–1621.

3）　VOC 1068, f. 430r., J. G. van Ravesteyn aan Bewindhebbers, Surat, 10–2–1619.

4）　VOC 1094, ff. 398r., 400v., 402v., Dagregister D. v. d. Lee, Surat, 2–4–1628.

5）　VOC 1106, ongef. 58v., Resoluties Surat, 20–4–1632.

6）　VOC 1117, f.461v., B. Pietersen aan H. Brouwer, aan boord van (この後 a. b. v) "Nieuw Hoorn", 22–4–1635.

7）　VOC 1175, f. 231r., Lijst van compagniesdienaren, 20–11–1651.

8）　F. S. Gaastra, De VOC in Azië tot 1680, pp. 201, 208.

9）　F. Lequin, *Het personeel van de VOC in de achttiende eeuw*, pp. 383, 393.

10）　G. Andriesz, *Beschrijving der Reizen*, pp. 20, 30., VOC 1227, f. 356r., Rapport van L. v. d. Dussen, voor Jafnapatnam, 25–4–1658.

11）　「キリスト教徒民族（ナーシ）」という概念の１つの広義の用法については、 F. Pelsaert, *Kroniek en Remonstrantie*, pp. 17–25 を見よ

12）　S. Wurffbain, *Reise*, pp. 67, 68. 後代のスーラトにおける葬儀の行列の叙述については、 A. J. Bernet Kempers, De Hollandse Grafmonumenten te Surat, pp. 73–78 そしてとくに F. Valentijn, *Oud en Nieuw Oost–Indiën, IV, 2*, pp. 280–282 を見よ。葬儀や参府旅行などのような厳粛な行事の時には、会社員たちは大部分インドの気候に全く適さないヨーロッパの服を着用した。しかし日常生活では「モール人」〔ムスリム〕の服が、時にはヨーロッパのズボンや靴といっしょにも着用された。1678年にＶＯＣは「無精な、怠惰な、女性的な……衣服」の着用を禁止しようと試みた――インド服の着用はムガル朝インドにおける会社の地位と調和しないであろうからという理由で。この禁令が成功しなかったことはほとんど確実である。 P. Mundy, *Travels,II*, pp. LII, LVⅢ , 218; P*ieter van den Broecke in Azië, II*, p. 313; VOC 1109, f. 113v., D. Coller en J. Pars aan J. Specx, Surat, 8–8–1632; VOC 1201, f. 632v., G. Pelgrom e. a. aan C. Reniers en Raden, Surat, 24–2–1653; J. A. von Mandelslo, *Journal*, p. 54; *Journaal van Dircq van Adrichem's Hofreis*, pp. 62, 185; P. v. Dam, *Beschrijvinge, II, 3*, p. 26; *Journaal der Reis van Joan Cuneus*, p. 9.

13）　たとえば VOC 1068, f. 315v., P. G. van Ravesteyn aan H. de Haze, Surat, 4–4–1618; VOC 1161, ff. 1024v., 1025r., A. Barentse aan Shahjahan, Surat, 29–1–1646; P. v. Dam, *Beschrijvinge, II, 3*, p. 20.

14) F. Pelsaert, *Kroniek en Remonstrantie*, pp. 25, 30, 32–36.

15) VOC 1111, f. 441r., H. Brouwer aan J. v. d. Graaff, Batavia, 15–8–1634.

16) VOC 1117, f. 429r., B. Pietersen aan H. Brouwer, a. b. v. "Nieuw Hoorn", 22–4–1635 を見よ。

17) 私貿易全般については、 C. R. Boxer, *The Dutch Seaborne Empire*, pp. 225–230; H. Furber, *Rival Empires of Trade*, pp. 307, 308; H. Dunlop, *Bronnen*, p. LXXVII; J. Aalbers, *Rijcklof van Goens*, pp. 107–119 を見よ。

18) J. B. Tavernier, *Travels, I*, p. 248; *Daghregister Batavia, 1664*, pp. 168, 169, 12–5–1664. この時代にはまだ汚職によって得た現金を本国へ移送するために手形を利用することはなされていなかったようである。18世紀にはこの方法がよく用いられた。 F. Lequin, *Het personeel van de VOC in de achttiende eeuw*, pp. 190–196.

19) Gemeente-archief Alkmaar, Collectie Aanwinsten 200, inventaris boedel van W. Geleynssen de Jongh, 28–1–1674.

20) VOC 887, pp. 465, 466, J. Maetsuycker en Raden aan D. v. Adrichem en Raad, Batavia, 10–10–1663.

21) H. Furber, *Rival Empires of Trade*, p. 227.

22) VOC 1135, ff. 480v., 481r., Attestatie tegen S. Wijbes, Surat, 16–11–1640, 1–12–1640.

23) Coll. Geleynssen no. 97a, W. Geleynssen aan C. Weylandt, Surat, 28–11–1640.

24) A. Das Gupta, *Indian Merchants*, p. 3.

25) *idem*, pp. 4, 5.

26) N. Steensgaard, *The Asian Trade Revolution*, pp. 151–153, 412.

27) *idem*, pp. 22–59.

28) *idem*, p. 100.

29) *idem*, p. 152.

30) P. J. Marshall, *East Indian Fortunes*, p. 33.

31) C. A. Bayly, Putting together the eighteenth century, p. 1.

32) *idem*, p. 13.

33) W. H. Moreland, *From Akber to Aurangzeb*, とくに pp. 302–305 その他。

34) M. N. Pearson, *Merchants and Rulers*, p. 2 その他。1972 年発表の一論文でピアスンは十分注目すべきことに逆の意見を主張した。すなわち商人と金融業者がムガル帝国のことに積極的に参加したと主張した。 M. N. Pearson, Political Participation, pp. 116, 128–131.

35) F. Perlin, The pre–colonial Indian state, p. 277 その他 ; K. Leonard, The "Great Firm" Theory; J. C. Heesterman, Was there an Indian reaction ? , pp. 38–42. 先行の注も見よ。

36) VOC 1170, f. 889v., A. Barentse aan Bewindhebbers, Suhali, 22–11–1648.

37) VOC 1236, pp. 650, 651, L. Winnincx e. a. aan J. Maetsuycker en Raden, Surat, 2–6–1661.

38) VOC 1160, ongef. 146r., A. Barentse aan Bewindhebbers, Surat, 26–1–1647.

39) G. W. Irwin, The Dutch and the Tin Trade, pp. 275, 278; S. Arasaratnam, Some Notes on the Dutch in Malacca, p. 481; H. Furber, *Rival Empires of Trade*, P.252.

40) S. Arasaratnam, Some Notes on the Dutch in Malacca, p. 482.

41) *idem*, p. 483; H. Furber, *Rival Empires of Trade*, p. 252.

42) G. W. Irwin, The Dutch and the Tin Trade, p. 279; *Corpus Diplomaticum Neerlando–Indicum*, *I*, pp. 365, 438, 439.

43) *Daghregister Batavia, 1641–1642*, p. 163, mei 1642, p. 174, oktober 1642; VOC 1144, f. 445r., P. Croock aan A. v. Diemen en Raden, Suhali, 3–5–1643; *Generale Missiven*, *II*, p. 217, 22–12–1643, p. 230, 9–1–1644.

44) Om Prakash, Asian Trade and European Impact, p. 45, ポルトガルのパス制度についてはさらにとくに次を見よ。 M. N. Pearson, *Merchants and Rulers*, pp. 39–56.

45) VOC 1157, f.518r., A. Barentse aan A. v. Diemen en Raden, Surat, 8–5–1641; *Daghregister Batavia, 1644–1645*, p. 255, september 1645 en pp. 264, 265, oktober 1645; Coll. Geleynssen no. 283, A. Barentse aan W. Geleynssen, Surat, 23–1–1645.

46) VOC 1152, f. 416v., A. Barentse aan Bewindhebbers, Suhali, 10–1–1646.

47) VOC 870, pp. 347, 348, C. v. d. Lijn & Raden aan A. Barentse, Batavia, 30–8–1646; *Generale Missiven*, *II*, p. 291, 21–12–1646.

48) VOC 1165, f. 442v., A. Barentse aan C. v. d. Lijn en Raden, Suhali, 25–4–1647; VOC 1165, f. 452r., A. Barentse aan C. v. d. Lijn en Raden, Surat, 1–5–1647; VOC 1165, ff. 454r., 454v., A. Barentse aan C. v. d. Lijn en Raden, Surat, 8–6–1647; VOC 1166, ongef. 815v., A. Barentse aan Bewindhebbers, Surat, 11–1–1648.

49) *Generale Missiven*, *II*, p. 316, 31–12–1647.

50) Om Prakash, Asian Trade and European Impact, p. 56; *Corpus Diplomaticum Neerlando–Indicum*, *I*, p. 520; VOC 1162, ongef. 134r., A. Barentse aan Bewindhebbers, Surat, 26–1–1647; VOC 1165, f. 432v., A. Barentse aan C. v. d. Lijn en Raden, Surat, 16–2–1647; VOC 871, p. 387, C. v. d. Lijn en Raden aan A. Barentse, Batavia, 7–8–1647; *Generale Missiven*, *II*, p. 291, 21–12–1646; p. 303, 15–1–1647 およびP.314, 31–2–1647.

51) VOC 1170, ff. 889v., 890r., A. Barentse aan Bewindhebbers, Suhali, 22–11–1648.

52) VOC 1168, ff. 570r., 570v., J. Diericq aan C. v. d. Lijn en Raden, Suhali, 26–4–1648; *Daghregister Batavia, 1647–1648*, p. 94, juni 1648; *Generale Missiven II*, p. 337, 18–1–1649; H. Furber, *Rival Empires of Trade*, p. 58.

53)　VOC 1168, f. 626v., Dagregister J. Tack, Delhi, 4–6–1648.

54)　*idem*, f. 627r.

55)　*idem*, f. 627v.

56)　VOC 1168, f. 645r., J. Tack aan J. v. Kittensteyn, Delhi, 18–8–1648.

57)　VOC 1168, f. 660r., J. Dierick aan C. v. d. Lijn, Surat, 19–9–1648.

58)　VOC 1170, f. 895r., A. Barentse aan Bewindhebbers, Surat, 22–11–1648. この点についてはさらに以下も見よ。H. Furber, *Rival Empires of Trade*, p. 269; *Corpus Diplomaticum Neerlando–Indicum*, *I*, pp. 520–528; *English Factories*, *1646–1650*, pp. XVI–XXI en p. 286, Pres. Merry etc. to Comp. Swally Marine, 25–1–1650; J. Aalbers, *Rijckloff van Goens*, pp. 72–74; Pieter van Dam, *Beschrijvinge*, *II*, 3, pp. 20–25.

59)　VOC 874. p. 343, C. v. d. Lijn en Raden aan J. v. Teylingen, *Batavia*, 30–8–1650; VOC 872, p. 218, Instructie door C. v. d. Lijn en Raden aan A. Barentse, Batavia, 6–8–1649; VOC 873, f. 94r., C. v. d. Lijn en Raden aan J. v. Teylingen, Batavia, 12–8–1649; *Generale Missiven*, *II*, p. 338, 18–1–1649.

60)　ＶＯＣは盗まれた商品の価値を、自明のことだが、過大評価した。そして盗まれた額より34,569ルピー多く受領した。VOC 1178, f.560r., J. v. Teylingen aan C. v. d. Lijn, Suhali, 9–4–1650; *Generale Missiven*, *II*, p. 414, 10–12–1650.

61)　VOC 1201, f. 664r., G. Pelgrom aan C. Reniers en Raden, Suhali, 29–4–1653; VOC 877, p. 381, Instructie voor R. v. Goens door J. Maetsuycker, Batavia, 19–9–1653; *Generale Missiven*, *II*, p. 798, 26–1–1655; J. Aalbers, *Rijckloff van Goens*, p. 75.

62)　たとえば以下を見よ。*Generale Missiven*, *II*, p. 647, 31–1–1653; p. 688, 19–1–1654; p. 752, 7–11–1654; *Generale Missiven*, *III*, p. 92, 4–12–1656; *Generale Missiven*, *IV*, p. 383, 13–3–1680; VOC 1215, ff. 662v., 663r., J. Thijssen aan H. v. Gent, Malakka, 31–12–1655; VOC 1215, ff. 732v., 733r., J. Pit aan H. v. Gent, Atjeh, 7–2–1656; VOC 1215, f. 522v., H. v. Gent aan J. Maetsuycker, Suhali, 29–4–1656; *Daghregister Batavia*, *1665*, p. 48, 8–3–1665.

63)　たとえば以下を見よ。J. Aalbers, *Rijckloff van Goens*, pp. 102–104, 120; *Journaal van Dircq van Adrichem's Hofreis*, pp. 16–26; VOC 1180, ff. 812v.–814r., J. v. Teylingen aan Bewindhebbers, Suhali, 9–2–1651.

参考文献〔序論関係〕

1） 未刊行史料

Algemeen Rijksarchief te 's-Gravenhage

- De Verenigde Oost-Indische Compagnie 文書（ＶＯＣと略称）
- Verzamelingen afkomstig van employés van de VOC. Collectie Geleynssen de Jongh.

Gemeente–archief Alkmaar

- Collectie Aanwinsten, nos.:185,192,195,200.

India Office Records in London

- Factory Records,Surat

2）刊行史料

Journaar van Dircq van Asrichem's Hofreis naar den Groot–Mogol Aurangzeb,1661. A. J. Bernet Kempers (ed.), 's-Gravenhage, 1941.

Georg Andriesz, *De beschrijving der reizen van Georg Andriesz, deur Oostindien d'eilanden, deur Sina, Tartarijen, Persien etc. sedert 1644*. A.Olearius (ed.), Amsterdam,1670.

Pieter van den Broecke in Azië, deel II. W. Ph. Coolhaas (ed.), 's-Gravenhage, 1963.

Bronnen tot de Geschiedenis der Oostindische Compagnie in Perzië, 1611–1638. H. Dunlop (ed.),'s-Gravenhage, 1930.

Corpus Diplomaticum Neerlando–Indicum; Verzameling van politieke contracten en verdere verdragen door de Nederlanders in het Oosten gesloten, van privile–gebrieven aan hen verleend, enz. J.E.Heeres en F. W. Stapel (eds.), 6 delen, 1907–1953.

Journaal der reis van den gezant der O. I. Compagnie Joan Cuneus naar Perzië in 1651–1652 door Cornelis Speelman, A. Hotz (ed.), Amsterdam, 1908.

Daghregister gehouden int casteel Batavia, etc., 31 delen. J.A. van der Chijs, en J.E. Heeres (eds.), Batavia en 's-Gravenhage, 1887–1931.

Pieter van Dam, *Beschrijvinge van de Oost–Indische Compagnie*, 7 delen. F. W. Stapel en C. W. Th. van Boetzelaer (eds.), 's-Gravenhage, 1927–1954.

The English Factories in India 1618–1669, 13 delen. W. Foster (ed.), Oxford, 1906–1927.

Generale Missiven van Gouverneurs–Generaal en Raden aan Heren XVII der Verenigde Oostindische Compagnie, 7 delen. W. Ph. Coolhaas (ed.), 's-Gravenhage, 1960–1979.

Johan Albracht von Mandelslo, Journal und Observation (1637–1640). M. Refslund–Klemann (ed.), Kopenhagen, 1942.

The Travels of Peter Mundy in Europe and Asia, 1608–1677, 6 delen. R. C. Temple (ed.), London, 1907–1936.

F. Pelsaert, *De Geschriften van Francisco Pelsaert over Mughal Indië, 1627. Kroniek en*

Remonstrantie. D. H. A. Kolff en H. W. van Santen (eds.), 's-Gravenhage, 1979.

J. B. Tavernier, *Travels in India*, 2 delen. V.Ball en W.Crooke (eds.), London, 1925.

François Valentijn, *Oud en Nieuw Oost-Indiën*, 5 delen, Dordrecht, Amsterdam, 1724–1726.

J. S. Wurffbain, Reise nach den Molukken und Vorder-Indien 1638–1646, deel 2. R. Posthumus Meyjes (ed.), 's-Gravenhage, 1931.

3）二次文献

J. Aalbers, *Rijcklof van Goens, commissaris en veldoverste der Oost-Indische Compagnie, en zijn arbeidsveld, 1653/1654 en 1657/1658*, Groningen, 1916.

S. Arasaratnam, Some notes on the Dutch in Malacca and the Indo-Malayan trade, 1641–1670, in, *Journal of Southeast Asian History*, 10, deel 3 (Dec.1969), pp.480–490.

C. A. Bayly, Putting together the eighteenth century in India. Trade, money and the 'pre-colonial' political order, paper voor "Second Anglo-Dutch Conference on Comparative Colonial History, sept. 1981, Leiden.

A. J. Bernet Kempers, De Hollandse Grafmonumenten te Surat, in, *Tijdschrift voor Indische Taal-, Land- en Volkenkunde*, 78 (1938), pp.65–92.

C. R. Boxer, *The Dutch Seaborne Empire 1600–1800*, Pelican, 1973.

A. Das Gupta, *Indian merchants and the decline of Surat c*.1700–1750, Wiesbaden, 1979.

H. Furber, *Rival empires of trade in the Orient, 1600–1800*, Minneapolis, 1976.

F. S. Gaastra, De VOC in Azië tot 1680, in, *Algemene Geschiedenis der Nederlanden*, deel 7, Bussum, 1980, pp.174–219.

J. C. Heesterman, Was there an Indian reaction ? Western expansion in Indian perspective, in, H. L. Wesseling (ed.), *Expansion and Reaction*, Leiden, 1978.

G. W. Irwin, The Dutch and the tin trade of Malacca in the seventeenth century, in, J. Ch'en en N. Tarling (eds.), *Studies in the social history of China and South-East Asia*, Cambridge, 1970, pp.267–287.

K. Leonard, The "Great Firm" theory of the decline of the Mughal Empire, in, *Comparative Studies in Society and History*, 21 (1979), pp.151–167.

F. Lequin, *Het personeel van de Verenigde Oost-Indische Compagnie in Azië in de achttiende eeuw, meer in het bijzonder in de vestiging Bengalen*, Proefschrift, Leiden, 1982.

P. J. Marshall, *East Indian Fortunes: the British in the eighteenth century*, Oxford, 1976.

W. H. Moreland, *From Akbar to Aurangzeb*, London, 1923.

M. N. Pearson, Political participation in Mughal India, in, *Indian Economic and Social History Review*, 9, no.2 (June 1972), pp.113–131.

M. N. Pearson, *Merchants and rulers in Gujarat: the response to the Portuguese in the*

sixteenth century, Berkeley, Los Angels, London, 1976.

F. Perlin, The pre–colonial Indian state in history and epistemology. A reconstruction of societal formation in the Western Deccan from the fifteenth to the early nineteenth century, in, H. Claessen en P.Skolnik (eds.), *The study of the state*, 's-Gravenhage, 1981, pp.275–302.

Om Prakash, Asian trade and European impact: a study of the trade from Bengal, 1630–1720, in, B. B. Kling en M. N. Pearson (eds.), *The age of partnership. Europeans in Asia before dominion*, Honolulu, 1979, pp.43–70.

N. Steensgaard, *The Asian trade revolution of the seventeenth century. The East India companies and the decline of the caravan trade*, Chicago, London, 1974.

H. Terpstra, *De opkomst der Westerkwartieren van de Oost–Indische Compagnie* (*Suratte*, *Arabië*, *Perzië*), 's-Gravenhage, 1918.